

巻頭言

人的資本の蓄積過程を模索するために —「個」・「世代」を超えて—

早稲田大学 政治経済学術院
野口 晴子

2016年8月6日、リオデジャネイロにおけるオリンピックの開会式において、オリンピック栄誉賞を史上初めて受賞したケニアのKipchoge Keino氏が行ったスピーチに感銘を受けた人は、少なくないだろう。「世界中の全ての若者が、基本的人権、食糧、安全な住まい、そして、教育を受ける機会が享受できるよう、私と一緒に取り組んでください。教育は、若者が、良き市民、そして、将来のリーダーとなるように、活力を与えるのみならず、彼らを変革へと導くでしょう。人類は、私たちが今日よりもより良き世界に若者を導くことが出来るかどうかにかかっています。私たちは、何も持たずにこの世に生を受け、何も持たずにこの世を去ります。しかし、私たちは、教育を通して、人類の未来を切り開いていくことが出来るのです。」オリンピック・パラリンピックというスポーツの祭典を通して、「個」が蓄積する教育や健康に代表される人的資本を「世代を超えて」生かすことの重要性に、あらためて思いを致す瞬間であった。また、そうした問題に取り組む一分野としての医療経済学、そして、当該分野に身を置く研究者の役割は何かについて考えさせられた。

教育と健康、そして、私たちを取り巻くさまざまな社会的・経済的状況との間に有意な相関が存在することについては、概ね、研究者間でコンセンサスが得られている。たとえば、教育がなく、社会的・経済的に不利な状況にある場合は、慢性疾患になる確率や死亡率が高い傾向にあることが知られている。他方で、健康状態が悪いために、教育を受けることが出来なかったり、社会的・経済的に不利な立場に置かれてしまったりする場合もあるだろう。しかし、そうした事実認知を超えて、多岐にわたるさまざまな要因がそれぞれ、どのようなメカニズムを通じて、私たちの人的資本と相互に関連し合うのか、また、その影響の有意性や大きさはどの程度のものなのか、そして、人的資本は、「個」や「世代」を超えて、コミュニティや人類社会にどのように受け継がれていくものなのか、確たる結論は、理論的にも実証的にも、いまだ得られていない。

かつて、著名な経済学者であるポール・サミュエルソンらは、次のように指摘した。社会科学は、自然科学とは異なり、実験的手法を用いることが困難な経済社会を分析対象としているため、「経済学者は、ほとんどの場合において、観察することで満足するしかなかった」。つまり、経済学では、社会における様々な現象に関連性があるかどうか（相関）については把握出来るが、原因と結果（因果性）の特定は難しい、という見解である。しかしながら、近年、同一個人を時系列で追跡するパネルデータの構築や、実験系・行動系の経済学者によるフィールド実験の実施、そして、計量経済学の理論とコンピュータによる計算能力の著しい発達を背景に、経済学を中心とした実証研究によって取り組まれてきたのが、こうした

複雑な因果性を識別し、紐解こうとする試みである。こうした研究の実施に当たっては、個人に関わるさまざまな情報の収集や侵襲が不可欠であるため、倫理的・財政的・政治的な課題が山積していることも確かだ。しかしながら、研究者によるこうした不断の試みが、いつの日か、Kipchoge Keino 氏によって示された命題—人的資本が「個」として蓄積され、さらには、「個」や「世代」を超えて継承される—に対し、普遍的な回答を与えると信じてやまない。